

で心配する向きも多いが、日本船は浅所～深くて70～80 m深を曳いており、それより深い所にタイ類と稚魚もいるとのニュースもあり、それほど心配もいらぬとの意見もある。イカ、タコ、タイを目的とする北西アフリカサワラ沖の集中操業海域には22隻が認可され、1年～1年半さきには出漁漁場を分け合い、資源枯渇のおそれもあり、このトロールの将来について将来協議を必要とするであろう。外販問題については日本トロール漁業は莫大な消費量を持ち、安定していて、世界に比類ない特質をもつて今日まで発展して来た。しかし70～80隻になると国内、国外(1)アフリカ沿岸、(2)欧州諸国)の市場が問題になるだろう。

例えば、英国系のナイジェリアには今までアジ、サバが相当量はいっていたが、対日輸入大巾制限も考えられる。動物蛋白不足のため比較的安価な日本のトロール「青物」を受入れ、人口7000～8000万人、首都Lagos及びPort Harcourtを中心に伸びており、5～6坪のプレハブ簡易冷蔵庫を建てて、日本冷凍魚の普及をはかつて来た。アフリカ諸国市場にどれだけ多量に販売できるかは疑問。というのは港湾施設が大へん悪く、荷受入れ、輸送路必ずしも定期的に行なわれず、魚価が採算的に必ずしも合わない。将来「青物」だけでなく「赤物」も希望されようが、先方の希望通りの量を充分輸入供給し得られまい。

キンマダイ、青物処理から始つたが、ケープタウン沖にHake(メルルーサ)が漁場開発され、比較的大型船が集つてくるようになった。英国、スペイン、豪州などにメルルーサの販売網ひろがったが、スペインは日本物受入れに相当制限があり、OECD加盟国は自由に貿易していても、非加盟の日本などには制限があり。メルルーサは大へん需要あるのであるがスペインは才2次大戦中立国、内戦に明け暮れたが、漁業に力を入れ、大型船建造して、南阿のメルルーサをもちかえつている。日本でもメルルーサ、カレイ、赤魚など国内で外国価格以上にさばけるようになってきた。英国ではメルルーサはかなり消費され、欧州、その他でもメルルーサの消費はある。国内市場は明るいが国外市場にも熱意をもつて打開していく必要がある。アフリカだけでなくアルゼンチン沿岸その他の開発にも目を向けて出てもらいたい。

質疑討論、新野：水産庁東光丸によい報告がある。委託しているか。岡田：来年度アフリカ西岸調査、その次に大調査船(2,600トン)できれば6カ年がかりで新漁場開発する。香川泉水試：ボルネオ沖にエビ漁場開発中。系統だつた資料(各社を含み水温、水深、底質など、抽出された船で予算化)を。矢部博：水産庁で連続資料収集、速トロ調査研究組織体制これまで全く不備であつた。本年漸く農林省遠洋漁業研究所(清水)発足の運びで、速トロ部門が作られよう。

2 トロール漁業と海底の研究

新野 弘 (東京水産大学)

日本でも近年北西大西洋でトロール試験操業中であるが、ソビエツトもウツホール沖でトロール船5～6隻操業しており、比較的深所の大陸斜面で大型のロブスターが多量に漁獲されている。6年前アルゼンチン沖のトロール漁場(以前Discovery号調査)を1週間大洋漁業船に乗つて底質等調査、メルルーサがたくさん漁れ、タラバガニも相当漁れた。南米東岸北部は東光丸

調査によれば、アマゾン河口沖には岩盤多く、エビ刺網に好適であり、ロブスターを多獲した。フランス船も来てエビの捕獲の競争になつている。戦前メキシコ湾に日本船が出漁したが、南米太平洋岸チリにはドイツ船も来て、帰化ドイツ人の水産会社「エセツサ」があり、深海手操船で酒田出身の日本人が深海エビ漁をやつて大へんな漁獲を上げていた。4年前アテネにもアフリカから日本船（大洋漁業）の揚げた漁獲物があり昨夏インドネシアでも1ヶ月海洋調査、エビ漁を行なつている。このように日本の大陸棚トロール漁業実績は世界に亘つている。大陸棚とその海底の状態、海底谷や浅瀬では湧昇流など起り、漁場としてその附近が特に利用される。海底泥中の有機炭素の多いところは漁獲の好い所と一致する。泥中の有機炭酸石灰は北緯 30° でピークで 40° では急減、ケイ素は北方の $40^{\circ}-60^{\circ}$ に多い。古い洪積世の堆積物は 40° Nあたりは大へん少なく、その北と南に多いが諸種鉱物資源堆積物および魚に大きな意味があるように思われる。黄海、東シナ海でも、ウラジオストックのピーター大帝湾でも、底魚好漁場と泥中の有機炭素量分布と大へん酷似する。

米国の大西洋大陸棚及び大陸斜面の地質調査のため魚類野生局調査では、深海サンゴ（トロールに邪魔）は1匁7000円もするが、大陸棚の端の relic にたくさん生えている。120~130 m以深で、 $14^{\circ}\text{C}\sim 20^{\circ}\text{C}$ の水温が限界であり200~700 m以深が漁場となつている。カナリー群島、地中海、インド洋、マルダイブ群島にも深海サンゴがとれる。日本「よみり号」で紀州で白サンゴ160 m深で採取、土佐では210 m深で桃色ボケサンゴを採取している。深海エビ（シヨウジョウエビなど）の冷水種が北海では50~70 m深でとれ（本年不漁の由）、アルゼンチン深海エビ未だ調査不足のようである。

3 西アフリカ底魚漁場と海況

宇田道隆（東京水産大学）

1963年3月18~19日ダカール会議で「西アフリカ大陸棚底棲魚潜在資源量と環境条件の関係調査」の報告があり、1965年1月にはE. POSTEL（フランスORSTM）のギニア湾トロール調査（G.T.S.=Guinean Trawling Survey）の報告があつた。アフリカ沿海ではアフリカ諸国と共にベルギー、フランス、西独、オランダ、米国、ソ連、日本などトロール操業をしているが、Cape Roxo（ $12^{\circ}20'N$ ）~Congo River（ $6^{\circ}S$ ）の沿海15~200 m深および400~600 m層の漁場を中心に63断面、8水層の観測調査を行ない、南半球の冬季7~9月にガーナ沖に中心をもつ湧昇流域の存在を明らかにした。米国フランスは象牙海岸調査、西独は底棲生物マイクロバイオマス調査の一方、ユネスコ援助でアフリカ魚類の大規模な調査を象牙海岸アビジャン中心に行なつている。G.T.S. I（1963年8月15~12月15日）、G.T.S. II（1964年2月15日~6月15日）が行なわれた。各船120日の活動で、曳網（サメ、エイ、タイ、エビ類等）を行なつた。

1. 開発し得る魚類の質的、量的組成を確定すること。
2. 最高商品価値をもつ魚種の魚体組成を確証すること。